

# やきもの

## 陶器の始まり

日本では古代から祭事用や日用雑器として土器が焼かれていましたが、釉薬を用いて芸術性の高い、色彩を持った陶器が本格的に焼かれるようになったのは奈良時代と言われています。釉薬とは表面を覆っているガラス質のもので、中国から伝わってきた技法ですが、やきものを美しく見せたり水分が染みこむのを防ぐ効果もあります。

鎌倉時代になると、東日本各地の窯で陶器が焼かれるようになりました。その中でも瀬戸（愛知県）は日本のやきものの産地として非常に有名だったので、陶器のことを「せともの」と呼ぶようになりました。

## 茶の湯とやきもの

安土桃山時代には茶の湯の台頭により陶器がさらに高級な芸術品として武士の間で脚光を浴びるようになりました。同じものが二つとなく、それぞれが異なる形、質感、色合いを持ったやきものの芸術性が茶の湯の美意識に合致したのです。茶人として有名な利休らは大名のお



茶の師匠として確固たる地位を築き、やきものの価値を高めることに一役買いました。またこの時代に京都では楽焼というブランドも生まれ、その技法は現在まで脈々と受け継がれています。楽茶碗はシンプルな造りですが、茶の湯では非常に格式の高い道具として扱われています。

## 磁器の誕生

秀吉が朝鮮出兵をした時に随行した大名たちが朝鮮から陶工を連れ帰ってそれぞれの城下で窯を開いたことにより、17世紀には西日本、特に九州地方でやきものが多く焼かれるようになりました。有田では帰化陶工の李参平が白磁鉱石を見つけて、日本で初めて磁器を焼いたと言われています。陶器



の原料は粘土で、素朴な風合いを持ち、土ものといわれますが（備前焼、萩焼など）、磁器は陶石粉碎した石粉を焼いたもので、素地は白く表面が滑らかで水を通しません。

17世紀半ばになると有田焼はオランダの東インド会社（VOC）により、ヨーロッパの国々に輸出され始めます。それらは伊万里港から出荷されたために「イマリ」と呼ばれ、金襴手と言われる赤と金色で彩色された非常に豪華な絵柄の大皿や花瓶などは当時のヨーロッパの貴族の間で大評判となりました。

明治以降、やきものの製造技術は飛躍的に進歩し、近年のやきものブームとも相まって、現在では伝統的なものから前衛的なものまでさまざまなやきものが日本各地で作られています。

#### 参考資料

日本やきもの史入門 矢部良明 新潮社

日本やきもの史 矢部良明 美術出版社

京都国立博物館 [HP](#)

日本のやきもの セラミックス協会 [HP](#)

ありたさんぽ 有田観光協会 [HP](#)